

---

# 思い出は美し過ぎて

檀 敬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

思い出は美し過ぎて

### 【Nコード】

N5185R

### 【作者名】

檀 敬

### 【あらすじ】

初恋の回想とそれに決別する自分を自伝的に綴った、詩的表現の作品。

僕はあの娘が好きだった。

ちよつと小柄で、丸い小顔で、目がクリクリとした、長い髪を三つ編みにしていたあの娘。

小学校の時、三つ編みのお下げ髪をいつも隣の席の男子が引っ張っていた。

あの娘はその度にその男子をよく怒っていたっけ。

小学校の頃なんて所詮子どもだった。

好きとか嫌いとかが、恋愛の対象とは思えなかった。

だけど、あの娘を見るとドキドキした。

中学生の時は一度も同じクラスにならなかった。

だけど、一度だけニアミスがあった。

悲しいけれど、相手が違うダブルデート。

自分の彼女より、あの娘の方が気になっているんだから。

そう、ご想像の通り。

自分の彼女にそれを見透かされて、引っ叩かれて、それで終わり。バカだよ、僕って。

そんなあの娘と、僕は同じ高校に入った。

高校生になったら、あの娘は長かった髪を切ってショートカットにしてパーマを掛けた。

その頃にはもう、僕はあの娘に興味を失いつつあった。

高校の時は、一度だけ話をしたかな。

それっきりだった。

大学生になって一度、街で見掛けたことがある。

僕が自転車に乗って交差点で信号待ちをしていた。その時、目の前に彼氏の車に乗ったあの娘が信号で止まった。何の気なしに視線を漂っていた僕と、助手席のあの娘の目が合った。

あの娘は僕を見つけて、何か言いたそうな視線を僕に突き刺した。だが、僕は青に変わった信号をサッと通り過ぎた。まるで、あの娘の視線を無視するように。もうあの娘のことは全く眼中になかった。ましてや、男の車に乗ったあの娘なんて。

それ以来、あの娘のことは一切分らない。何処で何をしているかなんて、思いもしなかったし、考えたこともなかった。

家庭を持った今になって振り返ると、僕はあることに気が付いた。あの娘のことなんて一切何も知らなかったことに。どんな色が好きだったのか。

なにが得意だったのか。どんなことに興味があつたのか。そして、僕のことをどう思っていたのか。あの娘のことを何ひとつとして知らなかったのだ。

でも、何も知らなくてよかった。何かしらでもあの娘のことを知っていたら、こんな思いにはならなかっただろう。

僕の記憶の中での「僕はあの娘が好きだった」という潔い想いは。

僕はあの娘が好きだった。  
今でもその部分はあるかもしれない。

だけど、それは形而上的で形骸化した「あの娘への想い」ではない。

そして、それはもう「美しい思い出」と化した中でしか存在しない想いなのだ。

そうして自らの気持ちの水底に深く静かに沈降していくだけだ。

僕はあの娘が好きだった。

ただ言えるのは過去形の言葉だけ。

「ぼくは、あのこが、すき、だった」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5185r/>

---

思い出は美し過ぎて

2011年4月13日01時49分発行